

矢筈城の概要

草苅衡継の矢筈城築城

矢筈城(高山城)は、津山市加茂町山下から知和にまたがる標高756メートルの矢筈山に、美作国と因幡国に勢力を有した国人領主の草苅衡継が、天文元年(1532)から翌2年(1533)にかけて築いた山城で、東西1,600メートル・南北500メートルの壮大な規模を誇る岡山県内で最大の中世山城です。

矢筈城の城郭構成

矢筈城は、標高756メートルという全国でも指折りの高地にある山城で、山頂と山麓の標高差、いわゆる比高も426メートルと非常に険しい要害の地に築かれています。

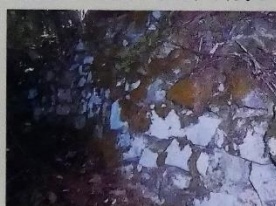
城郭の構成としては、山頂に「本丸」を置き、その北方に続く尾根上に「土蔵郭」「馬場」等の曲輪を、また西方に続く尾根上には「二の丸」「三の丸」「石垣段」「腰郭」「成興寺丸」をはじめとする数多くの曲輪を配した典型的な連郭式の縄張りです。『東作誌』によれば、「矢筈山四十二段ありて、土屋敷多くありしと云う」と伝えられています。

また、矢筈山の北西の山麓に位置する津山市加茂町知和の大ケ原には、「内構」と呼ばれる矢筈城主草苅氏の大規模な居館跡があり、矢筈山の山麓を北側から西側に向かって流れる加茂川の清流が天然の堀の役目を果たしていました。

矢筈城は、本丸・二の丸・三の丸を中心とする東郭群(古城)と、格式高い山上の御殿等を中心とする西郭群(新城)から構成される「一城別郭の構え」を持つ城で、当時における最新の築城技術である石垣が数多く用いられるとともに、狼煙場等の貴重な遺構も良く残っています。



石垣
(祭壇)



石垣列
(西尾根曲輪の北側)



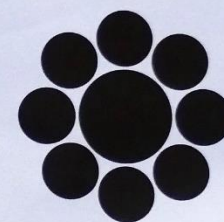
狼煙場跡
(西尾根曲輪)

矢筈城と草苅氏

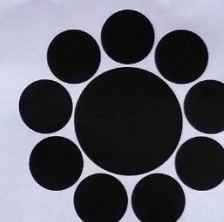
矢筈城主の草苅氏の出自については、用明天皇後裔説など諸説ありますが『萩藩閥閥録』や『東作誌』等によると、草苅氏の本姓は藤原氏で藤原鎌足から発して藤原秀郷の後、九代を経て氏家基近の時、寛元年間(1243~1247)に陸奥国斯波郡草苅郷(現在の岩手県紫波郡紫波町草刈付近)の地頭職となって、はじめて草苅と称しました。

その後、第十一代の衡継の時、天文元年(1532)から翌2年にかけて矢筈城を築城し、それまでの居城であった因幡国淀山城(鳥取県智頭町)から移りました。

そして、天正12年(1584)に、第三代城主の草苅重継が退城するまで、52年間にわたって草苅氏三代(初代城主・草苅衡継、第二代城主・草苅景継、第三代城主・草苅重継)の居城として使われました。



九曜

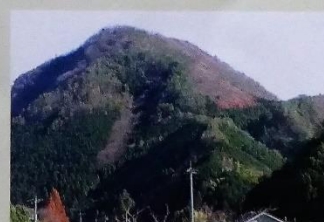


十曜

〈草苅家の家紋〉

草苅重継の矢筈城退城

「作州半国主」あるいは「美作の押さえ」と呼ばれ、その所領は2万石とも3万石ともいわれた草苅重継は、現在の岡山県北部や鳥取県南部を勢力下に置き、戦国大名の毛利氏に属したため、備前の宇喜多直家や秀家、そして織田方の羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)等の軍勢からたびたび攻撃を受けました。



矢筈城跡(知和側)

しかし、草苅重継はその都度撃退し、毛利輝元や吉川元春からの要請によって天正12年(1584)に退城するまで矢筈城を死守しました。

矢筈城は、秀吉の軍勢の猛攻をも退けた難攻不落の堅城として、また最後まで落城しなかった毛利方の最前線の城として知られています。

矢筈城各部の解説

津山藩士の正木輝雄は、矢筈山(高山)について、その著書『東作誌』の中で「凡そ高山は國中無双の一奇峰にして絶頂の巖壁^{がんぺき}実^{じつ}に矢筈^{やばし}の如く^{ごと}或は天を仰て口を開く獅子吼^{ししこう}のさまにも鬚髯^{しゅうなん}たり其の矢筈の口の間^{あいだ}凡そ八〜九間^{けん}深さ二十丈余^{じょう}尖^{せん}として巖^{いわ}するどく兀^{こつ}として削るが如し人みな戦慄^{せんりつ}して臨^{のぞみ}見ること能^{あた}わず」と述べています。

本丸……東西15間・南北6間 矢筈山の嶺^{みね}に在り古は四方へ掛^{かけ}作り有りと云う

矢筈山(高山)山頂の本丸には、山頂部分からはみ出して四方へ掛作りをしなければならないような大規模な建物があったと伝えられています。

二の丸……東西22間・南北10間

三の丸……東西13間・南北6間 以上三段となる

Ｌ字型をした天然の岩盤を活用した土塁が残っています。

土蔵郭……東西6間・南北3間 矢筈の下50間^{ばか}許り下にて一段郭なり、いにしえ米蔵ありたると云う

『東作誌』に記されている土蔵郭と馬場に挟まれた南北に細長い曲輪にも、曲輪の北端にある大型の櫓台を土台とした重層の櫓が建てられ、大型の倉庫として用いられたのではないかと考えられています。

馬場……東西43間・南北6間 土蔵郭の下にあり

長大な馬場で、ほぼ中央の東側にＬ字型をした天然の岩盤を活用した土塁が残っています。

以上大手の方にて山前なり

成興寺丸……東西30間・南北8間 いにしえ成興寺と云う禅寺草苧家の菩提所として此所に在し故名あり 矢筈山退城の後、成興寺小中原村に下れり

西尾根曲輪……東西80間・南北5間 成興寺丸の上の段なり中程北の方に城門の跡あり『東作誌』では「腰郭」

ほぼ中央に、曲輪を東西に分断する土塁と堀切があり、その西側には尾根上から北方に向けて『東作誌』で「城門の跡」と記された石で囲んだ遺構が残っており、東側には櫓台と狼煙場の跡と考えられる遺構が残っています。

小郭……東西10間・南北4間 腰郭の上 石垣下の段にあり

石垣段……5間四方 小郭の上にあり

石垣段……7間四方 5間四方の石垣段の上にあり北方へ下り道なり、東方4〜5間許り、北へ続き段あり

この7間四方の石垣段から北に下ると祭壇があり、祭壇の北側には御殿(城主居館)が、御殿の西側には客殿があったと考えられ、それぞれの曲輪の周囲には部分的に石垣が残っています。

また、この7間四方の石垣段のすぐ東側には磐座があります。

郭……東西27間・南北8間 7間四方の石垣段の上段にあり

石垣段……東西4間・南北6間 郭の上にあり

この石垣段と前記の郭の境は、曲輪の側面全体に石を積んだ全面石垣となっています。また、この石垣段のすぐ東側は断崖となつて一気に下り、三重の堀切が掘られており、尾根伝いの敵の攻撃を嚴重に遮断しています。

矢より登りて少し下り一段、東西6間・南北3間 南下り道知和村丸鞍^{まるくら} 北下り道アベノ門と云う城門の跡あり

以上^{からめて}搦手の方にて山後なり

矢筈二ノ丸より馬場まで凡そ2町10曲の坂路なり

馬場より山下村まで凡そ20余町7曲の坂路なり

矢筈山42段ありて、土屋數多くありしと云う

内構……矢筈山の北西の山麓に位置する知和の大ケ原にあり(『東作誌』等に基づく)



草苧景継花押

草苧家略系図

